早稲田大学広報 通号210号

CAMPUS NOW

2014 早春号

8 SPECIAL REPORT
早稲田の復興支援
— 東日本大震災から3年 —

広がる、つながる支援の輪

WAVOC：地域・人々とともにある支援とは

復興・未来へのアカデミズム

早稲田の復興支援の知見を世界へ
清水 敏 副総長

18 第二世紀へのメッセージ
株式会社東京証券取引所 常務取締役　静 正樹

20 My study, My career
国際学術院専任講師　東 玲奈

21 A WASEDA Miscellany
理工学術院教授　ゲスト マーティン

22 キャリアの羅針盤
キャリアセンター課長　白井由美

PRIZE

文学作品の中から最も優れた作品に授与

栩木伸明教授『アイルランドモノ語り』が第65回読売文学賞を受賞

アイルランドの文学・文化研究を続けている栩木伸明文学学術院教授の『アイルランドモノ語り』が、第65回読売文学賞を受賞し、贈呈式が2月24日、帝国ホテルにて行われました。一年間に発表・刊行された文学作品の中から各部門について最も優れた作品に授与される、読売文学賞。小説賞、戯曲・シナリオ賞、随筆・紀行賞、評論・伝記賞、詩歌俳句賞、研究・翻訳賞と6部門ある中、同作は随筆・紀行部門での受賞となりました。

栩木教授は、「大学からいただいた在外研究期間中にアイルランドで暮らし、ダブリンの町や旅先で出合った古物や絵や古本など、モノたちが語る身の上話に耳を傾けているうちに、『アイルランドモノ語り』が生まれました。小さな書物が、想像もしなかった大きなご褒美を連れてきてくれたので、とても驚き、感謝しています」と喜びのコメントを寄せました。

栩木教授

UNIVERSITY

下村文部科学大臣がCOI STREAM関連施設などを視察

「スマート・ライフサポート・イノベーション拠点」起工式を実施

12月24日、文部科学省「地域資源等を活用した産学連携による国際科学イノベーション拠点整備事業」に選定された『ネットワーク社会における安全、安心、快適な生活を低コストで実現する「スマート・ライフサポート・イノベーション拠点」』の整備のため、スマート・ライフサポート・イノベーション研究開発センター（仮称）の新築工事起工式が行われました。

鍬入れする鎌田総長

逢坂機構長から説明を受ける下村大臣（左）

同日午後には、下村博文文部科学大臣が来校。逢坂哲彌ナノ理工学研究機構長らの案内により、鎌田総長、橋本周司副総長らとともに、文部科学省／科学技術振興機構「革新的イノベーション創出プログラム（COI STREAM）」の関連施設に加えて、文部科学省ナノテクノロジープラットフォーム「蓄電池基盤拠点」やJST先端的低炭素化技術開発（ALCA）蓄電池プラットフォーム拠点の見学を行いました。

UNIVERSITY

500名に上る稲門経済人が参加

「WASEDA稲門経済人の集い2014」を開催しました

1月27日に、国内外の経済界で活躍する本学校友の方々を迎え「WASEDA稲門経済人の集い2014」を開催しました。今年で第4回となるこの集いは、大学の“今”を伝えるほか、稲門経済人同士が交流する機会を提供することも目的としています。当日は500名にも上るビジネスリーダーたちが一堂に会し、第一部は鎌田総長の開会挨拶に続いて、先進グリッド技術研究所所長の林泰弘理工学術院教授が『スマート社会の実現に向けて―スマートハウス・ビル・コミュニティからスマートグリッドまで―』について講演。第二部交流会では、クオンタムリープ株式会社代表取締役ファウンダー＆CEOであり、本学評議員会長の出井伸之氏から稲門経済人を代表して大学へ熱いエールを込めた挨拶がありました。

また今回は、本学が欧州委員会の委託を受け運営している「EUビジネスマン日本研修プログラム（ETP）」の研修員約30名も参加し、本学のグローバルエグゼクティブプログラムの取り組みを紹介。参加者たちの親睦・交流のほかビジネスネットワーク構築の機会ともなり、また、初めての試みである本学との連携に関する個別相談スペースにも多数の方々が見え、盛会のうちに幕を閉じました。

挨拶する出井代表取締役

RESEARCH & EDUCATION

世界の平和と人類の幸福の実現に貢献する研究を目指して

「研究の早稲田」から最先端の成果を報告

早大エジプト学研究所チームが岩窟墓を発掘

12月29日、エジプト学研究所（所長・近藤二郎文学学術院教授）が、エジプト・アラブ共和国南部のルクソール市対岸のアル=コーカ地区で、色鮮やかな壁画が描かれた保存状態の極めて良い岩窟墓を発見しました。同研究所が2007年に開始して以来、7回目の発掘調査が行われた新王国第18王朝アメンヘテプ3世治世末期の高官ウセルハト墓の調査中の出来事でした。

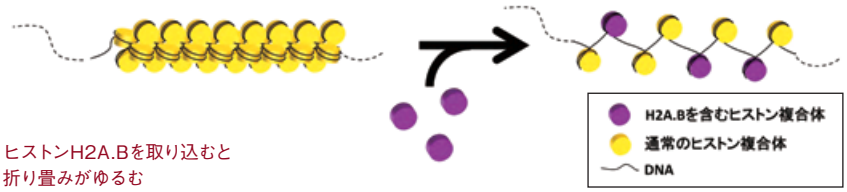
この墓は、古代エジプト新王国ラメセス朝時代のもので、被葬者は「ムウト神殿の醸造長」「ムウトの工房の長」の称号を持つコンスウエムヘブであると判明。墓の前室北側には、彼とその妻のムウトエムヘブ、娘のアセトカーの座像があり、前室の壁面には、コンスウエムヘブとその家族がオシリス神など古代エジプトの神々を礼拝する姿、前室の天井の中央には、太陽の船と「太陽神への讃歌」が記され、コンスウエムヘブが礼拝する姿などが鮮やかな色彩で描かれています。今後の調査により、この地域の岩窟墓の造営の歴史や当時の葬送儀礼、埋葬習慣など多くのことが判明することが期待されます。

墓の前室全体は美しい壁画が施されている

遺伝情報の調節に働く染色体構造を世界で初めて解明

胡桃坂仁志理工学術院教授および同研究室大学院生の有村泰宏さんが、木村宏大阪大学准教授、佐藤衛横浜市立大学教授らのグループと共同で、精巣に特異的に存在する遺伝情報の調節に働く染色体構造を世界で初めて解明しました。

ヒトの全遺伝情報が書き込まれている2メートルもの長大なゲノムDNAは小さく折りたたまれて細胞核内に収納されていますが、必要な遺伝情報の発現には折り畳みの部分的解除が必要です。今回の研究は、ヒストンH2A.Bと呼ばれるタンパク質がその折り畳みをゆるめ、DNAが機能しやすい環境を作っていることを明らかにしたもので、ゲノムDNAの修復・複製・転写のメカニズムを解明するために重要な発見です。加えて、精子形成過程の機構理解にも重要な知見を与えるもので、生殖医療の発展への寄与も期待できる成果であり、Nature Publishing Groupの『Scientific Reports』に掲載されました。



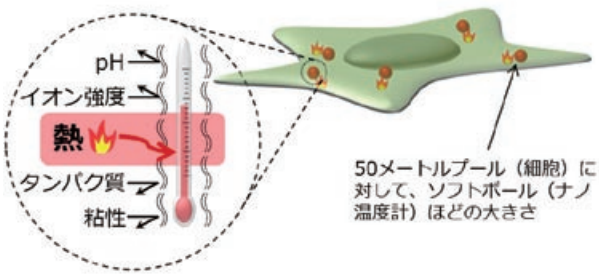
ヒストンH2A.Bを取り込むと
折り畳みがゆるむ

水中で細胞の温度を測る レシオ型ナノ温度計を開発

早稲田バイオサイエンスシンガポール研究所（WABIOS）の鈴木団主任研究員、理工学術院の武岡真司教授らのグループが、水中で触れることなく細胞の中の温度を測定する「レシオ型ナノ温度計」の開発に成功しました。2012年、細胞内の局所的かつわずかな温度変化の測定を可能にする細胞内を歩くナノ温度計の開発に続く研究成果です。

これまでの蛍光強度を測るナノ温度計では、対象の温度変化のみの測定でしたが、今回の開発では細胞が動いても測定することが可能となりました。

今回の成果は米国化学会（ACS）発行のナノテクノロジー専門誌『ACS Nano』に掲載されました。



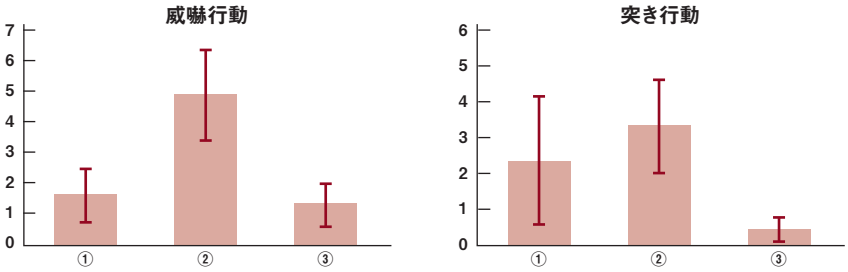
水中で、外部環境に応答せず温度だけを測るナノ温度計

雄の攻撃性を制御する仕組みを解明

教育・総合科学学術院の筒井和義教授・産賀崇由研究助手らのグループは、雄の攻撃性を生殖抑制ホルモンが制御する仕組みを解明し、英オンライン科学誌『Nature Communications』に発表しました。

筒井教授らは、その存在の予想から約30年見つからなかった新たな生殖抑制ホルモン（GnIH）を2000年に発見し、2012年にはGnIHが動物の攻撃性を抑制することを発表。今回は、攻撃性の高いウズラの雄の脳にGnIHや女性ホルモンを投与するなどの実験を実施し、GnIHが女性ホルモンを合成する神経細胞に作用して女性ホルモン合成酵素を活性化し、その結果、女性ホルモンの合成が著しく高まることにより雄の攻撃性が抑制される、という制御の仕組みを解明したものです。また攻撃性は女性ホルモンが微量だと増し、大量になると抑制されることも明らかにしました。

今後、人間についても同じ仕組みが存在することがわかれば、人間の攻撃性を安定させる方法の開発が可能となり、社会における平和や秩序に貢献することが期待されます。



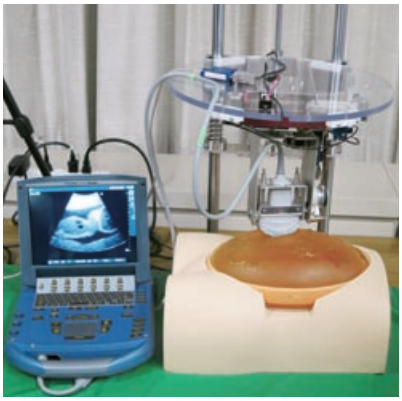
ウズラの攻撃行動の10分間における回数（バーはともに①通常、②GnIH発現抑制、③②にGnIH投与、の状態）

超音波診断ロボットの遠隔操作実験を実施

岩田浩康理工学術院准教授らが1月29日、超音波診断ロボットを利用し、遠隔地からの妊婦への超音波診断を想定した実証実験を公開しました。

機材の重さなど、妊婦への安全面の課題で実用化されていない遠隔超音波診断ですが、同准教授らの装置は構造面の工夫で課題を解決。エコー映像の取得に要する接触力以外の荷重が腹部にかからなくなり、妊婦の身体への負担を大幅に低減しました。

実験では、超音波に対して人体に似た特性を持つ素材に装着したロボット本体を配置した神奈川県産業技術センター（海老名市）と、医師のいる神奈川県立こども医療センター（横浜市）とを通信で接続し、映像・音声・ロボットへのコマンドを双方でやりとりしながら今後の課題を明確化。緊急の妊婦健診の時間短縮をはじめ、僻地や在宅での診察などさまざまな状況での実用化を目指しています。


遠隔地の医師がタッチパネルを用いてプローブ（探触子）を操作すると、左のエコー映像と同じものが医師の手元に映し出される

RESEARCH & EDUCATION

東アジアにおける村上文学をめぐって

国際シンポジウム「東アジア文化圏と村上春樹」を開催

4カ国8名の登壇者がそれぞれの視点から村上文学を語る

12月14日、作家・村上春樹氏（一文卒）のエッセイをきっかけにした、日本・中国・韓国間の文化交流について考える国際シンポジウム「東アジア文化圏と村上春樹―越境する文学、危機の中の可能性」（総合人文科学研究センター主催）が、井深大記念ホールにて開催されました。

これは、2012年、尖閣諸島の国有化において日中間の紛争が過熱した際、村上氏が新聞に投稿した「魂が行き来する道筋を塞いでしまってはならない」（朝日新聞9月28日）というエッセイが契機に。音楽や文化、映画、テレビ番組が多くの人に受け入れられ、楽しまれているという現在の東アジアに共通する“文化圏”が危機に瀕しているという同氏の危機感を共有する日本、中国、韓国、アメリカの8名の文学研究者や作家が集い、講演とパネルディスカッションで村上文学について活発に意見を交わしました。

RESEARCH & EDUCATION

早大など国内8大学が連携する日米研究インスティテュート（米国NPO）が

安倍政権の外交・安保戦略をテーマに国際シンポジウム

安倍政権が発足して1年、今後の外交・安全保障政策の方向性や課題、対応を考える国際シンポジウムが12月12日、国際会議場にて行われました。

基調講演では、マイケル・アマコスト元駐日米国大使が安倍政権の取り組みを概ね評価した上で、日米関係の重要性について言及し、小野寺五典防衛大臣は日本の安全保障環境の変化に応じた防衛力の整備と周辺国との対話の重要性について意見を述べました。

パネルディスカッションでは、村田晃嗣同志社大学長の進行のもと、谷内正太郎本学客員教授（初代国家安全保障局長）が「中国や韓国との関係における『戦略的忍耐心』」などの問題を提起。ほかにも東京大学の久保文明教授・池内恵准教授、早稲田大学の植木千可子教授、京都大学の中西寛教授、同志社大学の寺田貴教授、アマコスト氏らが活発な討論を交わしました。

会場は約460名の参加者で満員に。問題への関心の高さがうかがわれました。

超満員の会場で討論するパネリスト

RESEARCH & EDUCATION

映画に関係する講義を担当

映画監督の是枝裕和氏が理工学術院教授に就任

本年4月より、映画監督の是枝裕和氏（一文卒）が理工学術院教授に就任します。日本映画界における著名人をゲストに招く「マスターズ・オブ・シネマ映画のすべて」や、ヒットメーカープロデューサーとともに映画プロデューサーの仕事について学ぶことができる「プロデューサー特論」など、基幹理工学部を中心に映画に関するさまざまな講義を担当。グローバルエデュケーションセンターの全学共通副専攻「映画・映像」コースではコーディネーターとして運営に携わります。

就任に向けての挨拶に鎌田総長を訪れた是枝監督（左）

是枝氏は、「将来的には映画分野に限ることなく私の出身であるテレビも含めた広がりを持って映像をとらえ、制作のみならず、しっかりとしたリテラシーを身につけて他分野でも活躍できる人材を育んでいけたら」と抱負を語っており、同氏のもと、さらに多くの学生が充実した学びを得ることが期待されています。

ACTIVITY

今なお色褪せない世界観を未公開資料と共に再現

「いまだ知られざる寺山修司展」

戦後の日本を恐るべき勢いで駆け抜けた、時代の寵児「寺山修司」。47歳の若さでこの世を去ってから30年。寺山の母校である本学・演劇博物館に膨大な関連資料が寄託されたことを記念し、昨年11月26日から1月25日にかけて、展覧会を開催しました。同展では、絶筆『墓場まで何マイル』で「私の墓は、私の言葉であれば、充分」と書き残した寺山の“言葉”に注目し、その独創的な世界観を表現。幼少期から演劇実験室・天井桟敷旗揚げまで、創作活動の原点ともいえる若かりし寺山の創作に光を当て、いまだ知られざる“寺山修司”に迫りました。少年時代の俳句や短歌、大半を闘病生活で終えた早大生時代の創作メモ、その後手がけたラジオ・テレビ・映画のシナリオなど、その多才な表現領域、

数々の貴重な未公開資料を展示

そして寺山が遺した貴重な未公開資料に、訪れた人々は時を忘れて感動の面持ちで見入っていました。

ACTIVITY

小保方晴子氏もネット経由で出席

女性研究者の話を聞く女子会に、早稲田のリケジョが参集

女性研究者を招いた本学理工系女子学生向けの“女子会”が2月5日、先端生命医科学センター（TWIns）で開かれ150名を超える参加者がありました。

スクリーンからの小保方リーダーの話に聞き入る参加者たち

この女子会は生命医科学科の竹山春子教授が2年前から始めたもので、毎年2名の女性研究者を招いています。本年は東京大学の横山広美准教授が講演したほか、STAP細胞発見を発表した小保方晴子理化学研究所研究ユニットリーダー（2011年先進理工学研究科博士後期課程修了、博士（工学）早稲田大学）が、同所神戸事業所からインターネット回線を通じて参加しました。

横山准教授は科学コミュニケーション分野のパイオニア的研究者で、ヒッグス粒子を発見したアトラス実験グループの広報も担当。この日は参加者が女子学生だけとあって普段の講演では話さないという、結婚や出産などを含めた女性研究者としての経験のほか、素粒子実験で感銘を受けた研究者の言葉などを紹介しました。

また、小保方リーダーは、後輩たちに科学誌『Nature』に論文が掲載されるまでの苦労話を披露したほか、「今、理研で研究者をしていると感じるのですが、早稲田の理工の基礎実験のカリキュラムは本当によくできていると思います」などと、早稲田大学の思い出を話しました。

ACTIVITY

秋以降も好調

体育各部の活躍続く。高等学院もアメフト日本一に

2013年も多くの輝かしい成績を収めた早稲田スポーツ。年末には、関東大学リーグ優勝23回、全日本大学選手権優勝3回という成績を誇る男子バレーボール部が、12月8日の全日本大学選手権最終日、40年ぶりに決勝に進出。日体大をストレートで下し、61年ぶり4度目の優勝を果たしました。年明け1月には、スケート各競技の学生日本一を争う第86回日本学生氷上競技選手権大会の男子アイスホッケーで、本学が4年ぶり学生日本一の座を掴み取りました。さらに、苦しい決勝試合を制し2年ぶりの王座奪還を成しえた男子ラクロス部のほか、“絶対王者ワセダ”の名を守り抜き、団体男女アベック優勝を果たした合気道部、男子3組、女子1組が優勝し、圧倒的強さを見せた少林寺拳法部など、今後も体育各部の活躍から目が離せません。

また、高等学院米式蹴球部は、12月に行われた第44回全国高校選手権大会決勝（クリスマスボウル）で立命館宇治（京都）を破り4連覇。1月24日には大学を訪れ、創部以来5度目となる勝利を鎌田総長に報告しました。

勝利に沸く男子バレーボール部

味の素スタジアムで記念写真に収まる
高等学院米式蹴球部員たち

部名	大会名等	成績等
バレーボール部	第66回秩父宮妃賜杯 全日本バレーボール大学男子選手権大会	男子：優勝
スケート部	第86回日本学生氷上競技選手権大会	アイスホッケー男子：優勝
合気道部	第44回全日本学生合気道競技大会	男子乱取団体戦：優勝
	第44回全日本学生合気道競技大会	女子乱取団体戦：優勝
ラクロス部	第5回全日本ラクロス大学選手権大会	男子：優勝
少林寺拳法部	第47回少林寺拳法全日本学生大会	団体の部：優勝

ACTIVITY

ソチ冬季オリンピック、パラリンピック壮行会

学生4名、校友9名が代表選手に

これまでにも学生・校友・教員から多くの選手や指導者・スタッフをオリンピック、パラリンピックの舞台に輩出し、伝統とともに歴史に残る栄光を刻んできた早稲田スポーツ。2014年冬季オリンピック、パラリンピック選手団には学生4名、校友9名の選手と、監督・コーチ・スタッフとして5名の校友が参加しました。

1月20日には壮行会が大隈会館で開催され、足立友里恵選手、酒井裕唯選手、桜井美馬選手、菊池萌水選手の学生4名が参加。応援部のリードで“紺碧の空”“早稲田大学校歌”を斉唱し、それぞれの抱負が語られました。さらに鎌田薫総長から激励の言葉が贈られ、早稲田の誇りを胸にソチでの活躍を誓いました。

壮行会の様子

種目	名前（所属／卒業）
クロスカントリー	宮沢大志（スポーツ科学部4年・スキー部所属）
	成瀬野生（2007年スポーツ科学部卒）
	レンティング陽（2013年スポーツ科学部卒）
ノルディック複合	渡部善斗（スポーツ科学部4年・スキー部所属）
	渡部暁斗（2011年スポーツ科学部卒）
	永井秀昭（2006年人間科学部卒）
フリースタイル	高尾千穂（2006年人間科学部卒）
フィギュアスケート	羽生結弦（人間科学部通信教育課程1年）
ショートトラック	菊池萌水（社会科学部3年・スケート部所属）
	酒井裕唯（2011年スポーツ科学部卒）
	桜井美馬（2013年スポーツ科学部卒）
アイスホッケー	足立友里恵（2008年スポーツ科学部卒）
ボブスレー	佐藤真太郎（2003年人間科学部卒）

■ 2014年度 早稲田大学大学暦

入学式	学部		4月 1日㈫
	大学院		4月 2日㈬
春学期	春学期開始日		4月 1日㈫
	授業終了		8月 1日㈮
	夏季休業	自	8月 2日㈯
		至	9月20日㈯
9月学部卒業式、芸術学校卒業式および大学院学位授与式			9月20日㈯
9月入学式			9月21日㈰
秋学期	秋学期開始日		9月21日㈰
	創立記念日		10月21日㈫
	冬季休業	自	12月23日㈫
		至	2015年1月7日㈬
	授業終了		2月 4日㈬
	春季休業	自	2月 5日㈭
		至	3月31日㈫
学部卒業式、芸術学校卒業式および大学院学位授与式			3月25日㈬
			3月26日㈭

※原則として春学期授業開始日は4月5日㈯、秋学期授業開始日を9月25日㈭とします。

■ 2014年度入学式

1.学部合同入学式　4月1日㈫　戸山キャンパス 記念会堂

第1回	9：30	政治経済学部　法学部　文学部
第2回	11：45	教育学部　人間科学部（通信教育課程含む） 国際教養学部
第3回	14：15	文化構想学部　商学部　社会科学部
第4回	16：15	基幹理工学部　創造理工学部　先進理工学部 スポーツ科学部

2.大学院合同入学式
4月 2日㈬　10：00　記念会堂
※情報生産システム研究科は北九州学術研究都市会議場にて挙行

3.高等学院入学式
4月 8日㈫　10：00　大隈講堂

高等学院中学部入学式
4月 8日㈫　14：00　大隈講堂

4.本庄高等学院入学式
4月 7日㈪　13：00　大隈講堂

5.芸術学校入学式
4月 2日㈬　18：30　西早稲田キャンパス63号館03会議室（予定）

■ 箇所長の嘱任について

役職名	氏名	任期
大学総合研究センター所長（新設）	（新）橋本　周司	2014年2月1日～2014年9月20日

Special Report

早稲田の復興支援

東日本大震災から3年

Overview

広がる、つながる支援の輪

早稲田の復興支援の一部を紹介します。

宮古　市内各地での音楽交流

※詳しくはP12-13へ

盛岡　2013年11月1日「研究院フォーラム2013 in 盛岡」

「海・内陸・山の連携を求めて―震災復興における持続性と広域協力の構築」をテーマに、復興に関する研究成果などを報告。中川武理工学術院教授が現地調査等に基づく学生の設計案などの実績を紹介。岩手県大槌町の碇川豊町長、岩手大学の三宅諭准教授、岩手日報の榊悟報道部次長ら被災地の関係者がパネリストとして参加し、震災復興をめぐる諸問題について活発な議論が交わされました。

石巻　グリークラブによる鎮魂コンサート

2011年9月4日、8月末にようやく営業を再開した市内ホテルにて早稲田大学グリークラブによる鎮魂コンサートを開催。多数の校友、グリークラブOBである白井克彦前総長、400名を超える市民の方々が集まる中、男性合唱による校歌、紺碧の空、地元の民謡「斎太郎節」の力強い歌声が響きわたりました。

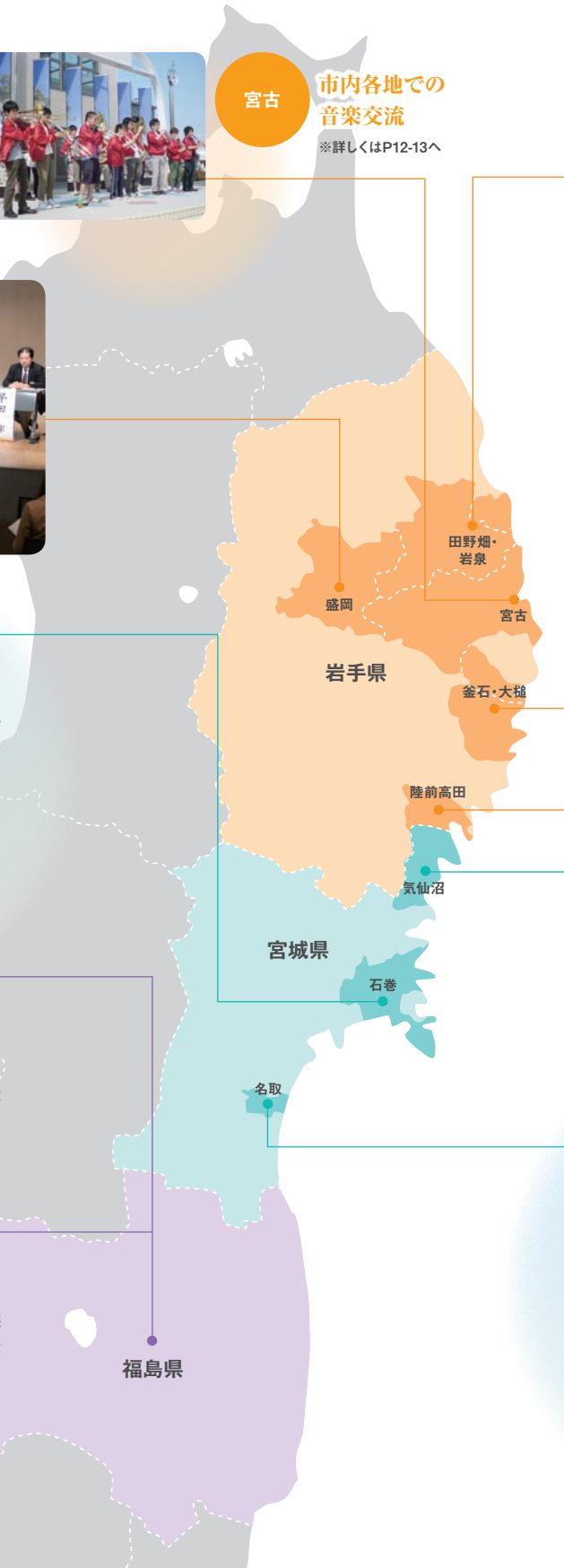
いわき市内のグラウンドにて、双葉高校・相馬農業高校の部員7名と野球交流（2014年1月）

福島県　早大野球教室など

2012年12月以降、野球部は相馬市、南相馬市、郡山市、いわき市の高校にて野球交流を継続的に行っています。そのほか、レスリング部、ソフトボール部、ラグビー蹴球部、グリークラブなども支援活動を行っています。

福島県　WAVOC※公認プロジェクト「CAP（Community AIDS Project）による学習支援活動」

2011年8月・12月、2012年2月・8月、2013年8月と双葉高校の2、3年生を対象とした学習支援合宿を続けています。また、勉強の合間にはスポーツや花火大会などを通じて、より深い交流の絆を強めています。



※WAVOC：早稲田大学平山郁夫ボランティアセンターの略称

2011年３月11日に東日本を襲った大地震から早3年。
復興への歩みはいまだ遅々としています。
早稲田大学は地震発生直後から被災した地域の復興、
未来のためにできること、すべきことは何かを考えて、
学内外でさまざまな支援活動を行ってきました。
あらためてこれまでの活動を振り返るとともに、
アカデミックな視点や災害に対する大学の姿勢をお伝えします。

田野畑・岩泉

WAVOC公認プロジェクト「“思惟の森の会”による育林活動」

2011年4月に現地入り、22日より直ちに本格的な支援活動として、流された漁具や漁船の片づけ、写真の洗浄作業、支援物資の整理・仕分けなどを実施。毎年恒例の年3回開催される育林合宿に加え、震災以来、毎秋開催される田野畑復興祈念祭への協力、稲門祭での田野畑産品のワカメの販売なども行っています。

釜石・大槌

WAVOC公認プロジェクト「RINC（Rural India&Nippon's Commitment）による地域の復興・活性化に向けた活動」

2011年9月から、複数回にわたり釜石市箱崎町に通い、戸別訪問やイベント開催、「町の魅力マップ」の作成、ボランティア連携の場づくりなどを続けています。早稲田祭2013では、RINCの活動報告会やパネル展、箱崎町の婦人たちが作った手芸品の販売を行いました。

陸前高田

市内の側溝の泥かきなど（2011年8月～）

※詳しくはP12-13へ

気仙沼

気仙沼チーム 仮設住宅での交流、学習支援、観光再生支援など

がれき撤去活動に参加した学生により2012年4月に発足した気仙沼チームは、仮設住宅でのお茶会や健康体操などの交流、気仙沼高校での学習支援、観光再生支援など、幅広い分野で市民の方々のニーズを伺いながら活動しています。

※詳しくはP11へ

名取

「なとり鎮魂灯籠流し」などのイベント運営

2011年8月に「なとり鎮魂灯籠流し」、2012年3月に「3.11ゆりあげの集い」、2013年3月に「名取3.11追悼イベント」が開催され、その事前準備と当日の運営補助として、多数の留学生を含む学生・教職員延べ177名がボランティアを行いました。同地域では、野球交流や閖上（ゆりあげ）中学校での学習支援活動なども実施しています。

大学の支援活動 ※活動の一部

2011年

3.11	東日本大震災発生、対策本部を設置 首都圏の帰宅困難者の一時待機施設として大隈講堂を開放
3.12	被災した2011年度入学希望者に対する各種手続き、在学上の経済的援助を決定
3.14	被災学生の学費免除ならびに奨学金制度の適用を決定
3.23	校友会と義援金・救援金についての取り組みを開始
4.4	WASEDA ONLINE（www.yomiuri.co.jp/adv/wol/）のオピニオンコーナーで「東日本大震災特集」として教員による分析、提言を発信開始
4.8	「東日本大震災復興支援室」（室長：鎌田総長）設置
4.11	文学学術院・東日本大震災追悼イベント『鎮魂―そして半歩のあゆみ』
4.11-12	WAVOC・震災ボランティアの先遣隊計28名を宮城県石巻市に派遣（以降、2014年1月末までに被災各地に 延べ302回4,404名を派遣） ※WAVOC全体の活動については次ページ以降およびWebサイト（www.waseda.jp/wavoc/）を参照
5.10	東日本大震災復興研究拠点を設置（3プロジェクト7課題を選定）※P14-15参照
5.11	理工学術院・被災地の教育研究機関へ実験機器などを提供
5.16	「東日本大震災被災学生支援奨学金」新設
6.14	演劇博物館グローバルCOEプログラム・フォーラム「大震災と芸術文化 現場からの証言」
7.2-3	鎌田総長が宮古・会津若松を訪問、復旧作業に参加
8.10	ビジネススクール・チャリティ講演会「学ぶことが、復興の力になる」
10.7	東日本大震災復興研究拠点公開シンポジウム「早稲田大学が取り組む復興研究」
10.8	アジア研究機構・第9回国際シンポジウム「3・11後の日本とアジア―震災から見えてきたもの」
11.28	『早稲田大学ブックレット〈「震災後」に考える〉』刊行開始※P16参照
12.3	チャリティイベント「第1回 早稲田駅伝 in 国立競技場」
12.11	東日本大震災復興研究拠点ほか主催シンポジウム・特別講演会「東日本複合大災害後の“日本人の心”そして“心のケア”を考える」
12.17	教育総合研究所・教育最前線講演会「震災と教育―学び、将来へ伝える」

2012年

2.10	GITIシンポジウム「未来のスマート社会と先端科学技術―3・11を乗り越えて」
3.8	東日本大震災復興研究シンポジウム「東日本大震災と福島原発災害から1年」
4.3	オープン教育センター「東日本大震災復興支援科目」開講
4.23	東日本大震災復興研究拠点・公開ワークショップ「1年間の調査・研究で見えてきた復興への新たな課題について」
5.25	『早稲田産学連携レビュー 2012』特集「早稲田大学の理工が考える防災と復興―そのとき大学はなにができるのか？」（朝日新聞出版）発行
6.5	環境総合研究センター「復興人材育成塾」開講
10.6	東日本大震災復興シンポジウム「東日本大震災復興と自然文化安全都市へ向けた課題」
12.21	被災5県の584高等学校に『早稲田大学ブックレット〈「震災後」に考える〉』既刊26冊を寄贈

2013年

3.8	人間科学学術院・第2回シンポジウム「東日本大震災と人間科学」
3.26	日英二国間セミナー「衝撃的被災と長期的減退への計画対応」
9.4	「減災研究の国際展開のための災害研究基盤の形成」が文科省に採択、津波・高潮・地震・噴火による複合災害研究の国際的研究拠点を形成
11.1	研究院フォーラム2013 in 盛岡
12.20	東日本大震災復興研究拠点公開シンポジウム「復興の先にある未来を見据えて進もう」

Support Activity of WAVOC

地域・人々とともにある支援とは

平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）のスタッフに
被災した地域における復興支援活動についてお話しいただきました。

校友、学生、教職員の三位一体で社会貢献に努める「早稲田型ボランティア」

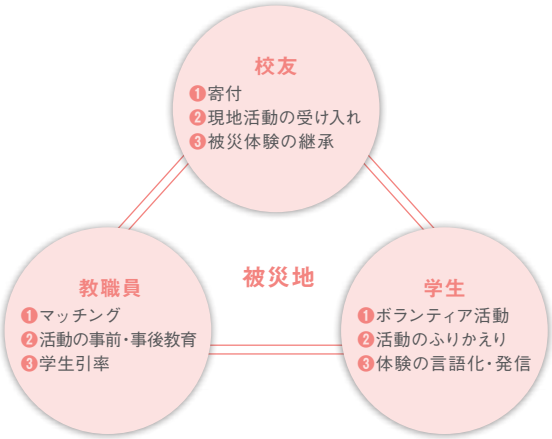
早稲田大学が行っている震災復興支援ボランティア派遣の中核的な役割を担うWAVOCでは、震災後いち早く先遣隊を派遣し、以来延べ302回、4,404名（2014年1月末）を現地に派遣してきました。その活動内容は、震災直後の泥かきや流出物の撤去にはじまり、復興イベント・観光支援、体育各部やサークル・各種グループなどによるスポーツ・文化交流、仮設住宅でのコミュニティづくり、子どもを対象とした学習支援、翻訳など多岐にわたります。2013年からは被災した地域の企業と連携したインターンシップなどもスタートしています。

震災直後からボランティアに携わっている学生たちは、道路が寸断され疲弊した町の姿を目にし、家族を亡くした地域の人々の言葉を耳にし、それぞれの立場で「いま何が求められているか」を模索し続けています。復興というあまりにも大きな課題に対して、ときに自身の力のなさに打ちのめされる学生たち。しかし地域の人々との交流を通じ、微力ではあるが決して無力ではないことに気づき、小さな取り組みを積み重ねてきました。そのキーワードとなるのが「地域・人々とともに」です。インフラ整備のような目に見える復興とは異なり、人々の心の復興には時間がかかります。若さに満ちあふれた早稲田の学生が各地域を訪れ、人々の傍らで、話に耳を傾けることが心の復興にお役に立てば幸いです。そうした学生たちの姿を通して、ワセダファンになったという声も数多くいただきました。また、地域の人の声を直に聞き、継続的に活動していくことで、地域の状況に合わせて支援の形を多様に変化させることが可能となっています。

私たちWAVOCは社会と大学のパイプ役として、体験的に学ぶ機会を広く提供することで学生が社会に貢献することを応援しています。特に復興支援に関しては、早稲田を卒業し、各地域で活躍されてきた校友をはじめ、各地域の人々から多くの協力をいただきました。そうした皆さんのお気持ちに報いるためにも、校友から大学、大学から学生・教職員へと襷（たすき）をつなぐことでそれぞれの立場で社会貢献に努めることができる「早稲田型ボランティア」を通して、これからも継続的な復興支援に努めたいと考えています。

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）スタッフ。
前列右から本間知佐子事務長、
コーディネーターの橋谷田雅志さん（2014年1月より競技スポーツセンター所属）
後列右から専任職員の鈴木護さん、福元彩子さん

早稲田型ボランティア



●WAVOCのWebサイト
http://www.waseda.jp/wavoc/

●WAVOC
東日本大震災復興支援
ボランティア活動記録
「微力だが無力ではない」

❶仮設住宅集会場における交流活動（2011年11月）
❷「気仙沼みなとまつり」オープニングセレモニー（2012年8月）
❸早稲田カップを開催（2012年6月）
❹2011年5月～6月の毎週末、気仙沼の内湾地区にて清掃活動
❺避難所（当時）となった体育館ロビーでStreet Corner Symphonyによるアカペラコンサート（2011年8月）
❻気仙沼の階上地区における植樹祭に参加（2012年10月）
❼がれきの中から大漁旗を発見。右から5人目が高橋正樹さん（2011年6月）

Report 01 | 宮城・気仙沼

気仙沼の人々のために！学生の思いがつなぐ気仙沼での支援活動

水産業と観光を基幹産業とし、フカヒレの生産地としても名高い宮城・気仙沼。地震、津波、火災などで大きな被害を受けたこの地域は、多くの校友からの支援を期待する声に応え、早稲田大学として最も早く復興支援活動を開始した地域のひとつです。学生ボランティアの宿泊施設にと会社の保養施設を提供してくださった校友で株式会社気仙沼商会の高橋正樹社長は、当時をこう振り返ります。

「正直、最初は『厄介な話が来たなあ』と思いました。しかしバス4台で来た学生たちは、作業着にヘルメット、軍手、マスクと完全防備。加えて、まったく笑わない真剣な顔、カオ、かお。現地OBとして、私が笑って見せるしかありませんでした。そんなに気を遣わなくていいと。それが私にとって久しぶりの笑顔となり、元気となりました。事前学習がなされ、私たちへの配慮が行き届いた学生たちの姿から、相当な覚悟で来てくれたことをひしひしと感じ、最初に厄介だと思った自分が恥ずかしかったですね。最後に皆で歌った校歌、流した涙はいまでも私の活動の原動力です」。

もっと気仙沼や先輩方のお役に立ちたい！との学生の強い思いはWAVOCスタッフの背中を押し、WAVOC東日本大震災復興支援プロジェクトの一環として気仙沼での活動の継続が決定します。同時に、気仙沼のためにと汗を流す学生を見た高橋さんから教育委員会や観光課などを紹介いただいたことで活動範囲は拡大。10月頃からは仮設住宅に暮らす人々への支援を中心に、学習支援やスポーツ支援など、地域の人々に寄り添った活動を中心に実施しました。2012年には地域の観光産業の再生と未来のビジョンを決めるための会議と連動したボランティアが始まり、毎週末に気仙沼へ通い、ホテルや民宿、レストランといった主要観光施設を通じて観光客へのアンケート用紙配布と回収を依頼。回収済アンケートの情報入力とデータ分析も行いました。2013年には学生が考案した気仙沼市のキャラクター・ホヤぼーやを使った体操が地域の皆さんから好評を博し、いまでは市内の保育園に導入されています。ボランティア活動の襷をつなぎ続けた学生たちの行動が、地域の人々との心のつながりを生み出しました。

そして現在も、気仙沼のためにとさまざまな活動が続いています。そのひとつが「海の照葉樹林プロジェクト」。海との共存を考えた減災対策として照葉樹を使った防潮林ベルトを築くこのプロジェクトは、気仙沼地域の植生に基づく種子や幼苗の採取・育苗・植樹をするというもの。息の長い復興支援に、早稲田は大学と附属高校が連携し、早大生、OB・OG、本庄高等学院生などが参加し動き出しています。WAVOCの廣重剛史コーディネーターは、「被災地の防潮林再生のため、地元で採取したツバキなどの苗木を育て、数年後に植樹祭を行います。気仙沼や他の支援団体の方々など、幅広い世代・立場の人が関わっており、今後は大学近隣住民の方々をお誘いする予定です。多くの人が復興支援に携わる機会をつくり、震災の風化を防ぐこともできるでしょう。また、早稲田での地域福祉の向上にもつながると期待しています」と、震災復興から生まれた地方との交流を、未来へつなげる覚悟で語っています。

Report 02 | 岩手・宮古

スポーツ、ジャズ、応援…さまざまな形で宮古の人々にエールを送り続ける

古来より津波被害の多い岩手・宮古は、大きな防浪堤を備えていたにも関わらず、田老地区をはじめ沿岸の集落が甚大な被害を受けました。多くの校友が地元の学校教員として活躍していたこともあり、早稲田は2011年5月から宮古北高校を宿泊拠点としてボランティア活動を開始します。宮古での支援活動は、地域の人々からの要請に応えた「気持ちを盛り上げる」ための活動が中心です。地域の人々にエールを送り続けた応援部、「七夕コンサート」や三陸鉄道のホーム、車内でジャズを演奏したニューオルリンズジャズクラブなど。さまざまな形での早大生のエールに触れた宮古市民の松原安子さんは当時を振り返ってこう話します。

「震災後、無音の町に初めて音楽が流れ、全身で聞いたジャズの音色をいまも鮮明に思い出します。駅前商店街、三陸鉄道での演奏に、癒され、勇気づけられました。2011年にはクリスマスコンサート後に市役所前の歩道橋の上から、多くの人々の眠る宮古の海に向けて演奏してくださり、夜空に響く音色に、魂が救われるのを感じました」。

また、レスリング・柔道・野球などスポーツ交流も積極的に行われました。柔道部の指導を受けた佐々木碧衣さん（当時宮古高校2年）は、「遠い存在だった早稲田大学がわざわざ宮古高校に来てくれたことに感激しました。とても親切な指導にワセダファンになりました」と早稲田大学へ進学。いまでは社会科学部で学びながら、柔道部の一員として地元・宮古へのスポーツ交流に参加しています。支援を受ける側とする側の両方の立場から、「もっと現地の人たちと交流できる支援を期待しています。被災した人たちの話を聞いたり、場所に行ったり。もっと知った上で、何が本当の支援になるかを考えることが大切だと考えています」と話しています。

Report 03 | 岩手・陸前高田

「微力だが無力ではない」“学びの部屋”学習支援&はまらっせん農園プロジェクト

❶稲門祭にて、はまらっせん農園で獲れた野菜を販売。右から菅野和子さん、山本太郎さん（2013年10月）
❷はまらっせん農園で地域の皆さんと一緒に農作業（2013年9月）
❸卓球部による技術指導と交流（2011年7月）
❹学びの部屋で子どもたちに勉強を教えるボランティア学生（2013年2月）
❺早稲田カップを開催。8チーム約320名が参加（2012年9月）
❻高田町の田畑でがれきの撤去や草刈りをする学生（2011年8月）
❼野球交流の一環で、被災した高田高校の建物内を歩きながら震災当日の説明を受ける野球部員たち（2012年1月）
❽高田高校の文化祭「高高祭」で歌う早稲田大学混声合唱団（2012年8月）

早稲田の復興支援
―東日本大震災から3年―

❶ニューオルリンズジャズクラブによる音楽指導（2011年7月）
❷清掃活動に参加する鎌田総長（2011年7月）
❸クリスマス点灯コンサート翌日に宮古の山本正徳市長（中央）を囲んで。市長の左が松原安子さん（2012年11月）
❹応援部員と中学生の合同パフォーマンス（2011年10月）
❺野球部員による技術指導（2012年1月）
❻柔道部による合同稽古。前から2列目、左から4人目が佐々木碧衣さん（2011年7月）

復興の希望「奇跡の一本松」がある岩手・陸前高田は、大津波により市街地が甚大な被害を受け、震災直後はボランティア派遣のニーズを探るどころではない状況でした。2011年6月、高田高校卓球部のインターハイ出場の知らせを受け、早稲田大学卓球部の派遣が決定します。大学選手権を目前に控える中、監督の「これは最優先事項です。遠慮しないで」との声に後押しされ、代表選手たちによる技術指導と交流活動が始まりました。津波で両親を失った高校生の前向きな生き方に触れた学生の一人は「自分は勝つことがすべての自己中心的な人間だった。将来は世の中の役に立つような仕事をしたい」と価値観が転換。社会人になったいまも個人的に高田高校を訪問して卓球交流をしています。

時間とともに変化する支援ニーズに応え、がれきの撤去や側溝の泥かきといったハード面の支援から、小・中・高生の部活動や応援団の指導、「学びの部屋」での学習指導、あるいはスポーツ交流、病院でのコンサート開催など人々に寄り添ったソフト面の支援が増えていきます。同年8月に柔道部員が現地の高校に畳を届け、2012年1月には野球部による技術指導、9月はア式蹴球部と日本サッカー協会特任コーチ（当時）で校友の加藤久さんの協力による「早稲田カップ」を開催。地元の指導者の方々も、久しぶりに瞳を輝かせる子どもたちの姿に感動し「これから毎年、この場所で早稲田カップを開催してほしい」と口々に語られました。

また2012年12月には、校友で陸前高田市教育長の山田市雄さんを通じて、長期休暇中に開催される東京大学と合同の学習支援活動「スリーデイズ・プログラム」（現地での平日3日間の活動）が実現します。さらには、夜行バスで東京を出発し、翌朝の現地到着後に中・高生への学習指導を行い、再び夜行バスで東京に戻るという「0泊3日プログラム」を、月2回のペースで継続しています。学生たちの姿に、山田教育長は「震災直後から0泊3日の強行日程で被災地に飛び込んだ早稲田スピリットにあふれた学生たち。そうした学生を育てている母校・早稲田大学にかつてないほどの誇りと頼もしさ、そして感動を覚えました。子どもたちにとって早稲田大学が身近であこがれる大学になってきていることはOBとして大変うれしいことです。学生を通じて、早稲田大学が持っている力を、特に被災地の児童生徒に対する支援活動を継続的に展開していただきたいですね。本市における、中高生への学習指導、運動部や文化部への部活動指導などはぜひ継続をお願いします」と話しています。

現在は学習支援に加え、「はまらっせん農園プロジェクト」も加わり、月1～2回の活動を行っています。「はまらっせん」とはこの地域の方言で「どうぞ、誰でもお入りなさい」という意味。校友の石木幹人さんが2013年3月まで院長を務められた岩手県立高田病院が推進するプログラムで、仮設住宅入居者の生活不活発病予防のために農作業を促し、心身の健康維持を図るものです。仮設住宅に住む菅野和子さんは「早稲田大学の学生が来てくれたことに感激しました。賢そうな子たちで、卒業生や大学のバックアップもしっかりしているように思え、息の長い活動をしてくれると期待できました。昨年10月、大学キャンパスでの稲門祭で学生たちと一緒に農園で獲れた野菜を販売したことは一番の思い出です。今年もぜひ一緒にやりたいですね」と、早稲田の学生との交流について話しています。

プロジェクトのリーダーで、孫のように歓迎してくれる人々の心に触れた創造理工学部4年の山本太郎さんは「現地の人たちと交流し、直接話を聞かなければ分からないことがあると考えています。学生にできることは微力かもしれませんが、決して無力ではないことに気づくことができました。確実に継続することなら自分にだってできます。今は一人の人間としてこの地域に寄り添っていたいです。そして、将来は技術者として陸前高田の復興に携わり、リーダーシップを発揮したいと思います」と決意を語っています。

A Study on the Reconstruction

復興・未来へのアカデミズム

早稲田大学では、2011年5月11日、東日本大震災の復興を目的として叡智を結集する中長期の研究プロジェクトとして、3プロジェクト7課題からなる「早稲田大学 東日本大震災復興研究拠点」（拠点責任者：深澤良彰・研究推進部門総括理事）を設立しました。東日本大震災の復興に資するとともに、他地域での同様な災害による被害の最小化にも貢献できうる重要な研究課題として注目されています。同拠点の活動に、WASEDAサポーターズ倶楽部の支援も受けて、大学は年間最大2千万円を3年間助成してきました。ここでこの3年間を振り返り、研究成果と今後の課題について考えます。

http://www.waseda.jp/rps/fas/research-expenses/fukkou.html

1. 医療・健康系復興研究プロジェクト

研究代表者： 中尾洋一 理工学術院教授
研 究 課 題： 大震災がもたらす健康被害の予防へ向けた科学的・社会的対応のためのニーズ調査研究

2. インフラ・防災系復興研究プロジェクト

研究代表者： 柴山知也 理工学術院教授
研 究 課 題： 東北地方太平洋沖地震津波の被災分析と復興方略研究

連携研究者： 香村一夫 理工学術院教授
研 究 課 題： 東日本大震災復旧・復興に向けた環境診断および対策技術の提言

連携研究者： 松岡俊二 国際学術院教授
研 究 課 題： 複合巨大クライシスの原因・影響・対策・復興に関する研究―原子力災害とリスクガバナンス

3. 都市計画・社会システム系復興研究プロジェクト

研究代表者： 中川 武 理工学術院教授
研 究 課 題： 文化遺産から学ぶ自然思想と調和した未来型復興住宅・都市 計画に関する総合研究

連携研究者： 浦川道太郎 法学学術院教授
研 究 課 題： 早稲田大学東日本大震災復興支援法務プロジェクト

連携研究者： 早田 宰 社会科学総合学術院教授
研 究 課 題： 大規模災害への復元力のある新たなグローバル社会システムの再構築

各プロジェクトの研究代表者に、研究内容と成果報告を伺いました。

中尾洋一
理工学術院教授

医療・健康系復興研究プロジェクト

復興の先にある未来を見据え環境汚染

当研究プロジェクトは浅野茂隆先生が中心となって立ち上げたもので、①災害時の適正なリスク・コミュニケーションの確立とコミュニティの形成、②災害時医療体制の確保と国際的連携の促進、③災害時に有用なデバイス機器の開発、④災害時に拡散しうる各種有害化学物質が健康に及ぼす影響に関する作用機構の解明・治療法の開発、の4グループによる分野横断的な研究を展開してきました。

私は津波被害のあった沿岸地域の土壌サンプルの収集・分析を行い、一部について環境汚染物質の拡散状況と生物的への影響を調査研究しています。特にこの分野は化学物質が及ぼす長期的影響の適切な評価法の確立が

柴山知也
理工学術院教授

インフラ・防災系復興研究プロジェクト

東北地方太平洋沖地震津波の被災分析

想定する津波の規模を見直すとともに、想定値に縛られずに、それを超える津波が来襲した場合にも対応可能な避難計画を作成するなど、防災計画の練り直しを提案しています。また津波防潮堤の越流現象の解明や洗屈防止策の検討を行い、津波来襲時に粘り強く抵抗し、頼りになる構造物や防潮林との組み合わせを考案しました。一方で、東北の津波では、防災構造物のみで居住地を守ることは困難であることがはっきりしたため、避難計画の修正というソフト面での対策についても数値シミュレーションモデルを開発して、具体的な避難路の選定方法の提案をしています。

中川 武
理工学術院教授

都市計画・社会システム系復興研究プロジェクト

個人・コミュニティが自然と調和する生き

当研究プロジェクトは、被災地のコミュニティの復興、再生のために必要な都市・集落計画の方法と地域経済や法務的課題の調和的解決を、都市・建築、社会学、法学系チームの協力により探究するものです。

私のチームのこれまでの成果は、『早稲田大学ブックレット〈「震災後」に考える〉』シリーズの『文化遺産の保全と復興の哲学』（2012年4月）と『復興まちづくりに文化の風を』（2013年10月）にまとめました。特に岩手県大槌町において、復興のために、伝統芸能・文化財建造物・自然が果たしている役割に注目し、本学と中国の大学の建築学科の学生が現地に入り、地元の自治体や住民との

物質の長期的影響の評価を行いたい

遅れているため、客観的な規制基準を設けるためにも地道な調査・実験が必要です。環境中に広がった化学物質と健康の因果関係を明確にすることは予防および治療法の確立を可能にすると同時に、健康に影響する化学物質に特化したセンシング機器の開発など他分野の進展にもつながると考えています。

今後はプロジェクトの成果をイノベーションとして発信し、日本だけでなくアジア地域の医療分野における社会貢献につなげていく必要があるでしょう。復興の先にある未来を見据えて、これからも分野横断型の研究を地道に継続していきたいと思います。

と復興方略研究

複合災害への対応を考えると、研究者間の連携を促進し、融合分野を形成していくための仕組みが必要です。これまでに築いてきたカナダ、イギリス、イラン、インドネシア、ベトナム、タイ、スリランカ、タンザニア、ブータンなどの災害研究者との国際ネットワークを緊密にすることによって、①構造物の減災、②複合災害の減災の2テーマについて早大理工を災害研究の国際的な拠点にすることを目指していきます。また、これまでに開発した津波・高潮の予測プログラム、構造物周辺の流動予測プログラム、現地観測、水理実験の方法など、研究成果をパッケージとして世界の災害に応用し、その汎用性を高めたいと考えています。

方を考えること

協力のもとにヒアリングや比較調査を重ね、解決に向けたアイデアを話し合うためのワークショップを2012年5月と2013年5月に行ったことは大きな成果です。また、2013年11月には研究院の成果発表を盛岡で行うことができたことも特筆したいと思います。

私が、現時点で考えていることを誤解を恐れずにいえば、震災復興は、防潮堤の高さを10mから15mにし、地域経済の基盤の再建によって始まるのではなく、自然の恵みを受け、たたかい、それと調和する生き方を個人とコミュニティ・共同体の基礎に、そして文化的創造性や安全性の核心に据えることによって可能となるに違いない、ということです。

連携研究者に研究課題について伺いました。

東日本大震災復旧・復興に向けた環境診断および対策技術の提言

香村一夫
理工学術院教授

大きな地震により生まれるさまざまな環境破壊や環境問題に対して「研究面から如何に貢献できるか」を探ってきました。現在は、津波塩害耕作地の復活に向けて、東北地方に分布する火山灰土壌を用いた低コスト・低労力・環境低負荷の浄化法を開発しています。この技術は、塩害で困っている世界の乾燥地域にも応用可能です。世界へ羽ばたける技術としてさらなる改良を試みています。

複合巨大クライシスの原因・影響・対策・復興に関する研究—原子力災害とリスク・ガバナンス

松岡俊二
国際学術院教授

私たちの学際共同研究は、原子力安全規制と福島復興をメインテーマとし、大震災と福島原発事故で被災した人々に向き合い、そこから学ぶことで、原子力政策や復興政策と大学の教育研究のあり方について考えてきました。今後も、本学と福島復興を調査研究で結び、多様性を生かした社会イノベーションの創発による持続可能な社会のあり方について研究を続ける予定です。

早稲田大学東日本大震災復興支援法務プロジェクト

浦川道太郎
法学学術院教授

本プロジェクトは、法学学術院の教員有志を中心に立ち上げたものです。福島県浪江町当局との密接な協力のもと、町民の被災実態調査や慰謝料増額の集団申し立てなどを支援しています。法科大学院生も大きく貢献しており、臨床法学の一端を担ってもいます。今後は他の被災町村とも協力して、災害復旧の進展に伴い生じる新たな法的課題に対応した長期的な被災者への支援を継続する予定です。

大規模災害への復元力のある新たなグローバル社会システムの再構築

早田 宰
社会科学総合学術院教授

グローバル社会において大災害からの復元力を確保するためには地方自治体や政府の力だけでは限界があり、海外からの財政的・人的・知的支援が重要となります。農林漁業地域においても、東日本大震災後は海外との交流事業や復興の検証セミナー、医療支援や農水産業機材の提供、水産業視察など多様な支援がされています。これらの参与観察を継続し、支援要素が復興成果となるまでの過程を検証することで、復興政策のグローバルモデル確立を目指します。

各研究分野で活躍する本学教員に「復興」をテーマに寄稿していただきました。

復興とジェンダー

村田晶子
文学学術院教授

「生きていくことを支え合う」復興に向けたコミュニティづくりを

私は、この2年間、福島県男女共生センターからの委託研究事業「復興に向けた地域コーディネーターのコミュニティづくり―男女共同参画社会実現の視点から」の研究代表者として、男女共同参画やジェンダー、専門である成人教育、対人支援職の支援の観点から復興支援に関わっています。痛感したことは、福島への差別的眼差しと、日常に戻ろうとするときに「福島で起きていること」を忘れる傾きがあること。これをいかに考えるべきか、重い課題です。一方で、自治体職員や保健師、女性センターなど各種施設職員、女性団体などの支援職や地域コミュニティのコーディネーターが、福島の現実に向き合いながら日々の営みを語るときに紡ぎ出される「生きていくことを支え合う思想」と出会いました。その一言一言に大学や研究者は何をしなければならないのか、揺さぶられています。

復興とこころのケア

本田恵子
教育・総合科学学術院教授

震災後の心のケア ～被災した子どもの心とともに～

直接支援から、傷を抱えながらも健康に生きていくための継続支援へと変化する中、仮設住宅を訪問するボランティアスタッフへの支援と学校現場で子どもたちに生じるさまざまな課題の予防、対応する先生方への支援を行っています。復興に向けて進む人々のエネルギーと発想力は素晴らしい一方で、取り残された人との格差は広がり、仮設住宅内での人間関係のトラブル、子どもたちの非行、犯罪などが増えています。

研究室の大学院生と共に、1～3カ月に一度、ボランティアスタッフの聴く力の研修を行い、事例検討や具体的な支援方法を伝えています。また、学校を訪問して教職員の研修を行い、ストレスへの対応が難しい子どもたちの話の聴き方、キレる場面での対応方法について具体的な声かけや対応を継続的に学んでいます。

復興とマーケティング

武井 寿
商学学術院教授

存在に寄り添う消費

宮城県が復旧期と計画した3年間が経過し、この間に数名の東北出身者が当ゼミを巣立ち、卒業生も含め多数の者がさまざまな職種で東北に関わっています。昨夏、複数の課題本を提起しレポートを求めたところ、仙台出身の2名は震災関連の書籍を選択しました。郷里への深い思いと連帯の意識は私たちの想像を越えるものと感じます。

研究は対象化を基本としています。震災で亡くなった親族の帯を形見としてクリーニングする、カラオケで互いの無事を確認し元気を回復するなど、自分の今と、過去や将来を結びつけて存在を認識することが消費を通じて行われています。地元の人々の失われた日常性を取り戻すには血の通った支援が必要と言えましょう。東北への支援は祈りの気持ちでと考えます。

復興をさまざまな角度から考える オープン科目

本学学生が、復興について政治、経済、法律、科学、健康など多角的な視点から考えることができるよう、全学生が受講可能なオープン教育センター設置科目として「早稲田大学発・これからの日本を考える」（2012年度）や「震災復興のまちづくり JA共済寄附講座」（2012・2013年度）などを開講しました。

『早稲田大学ブックレット〈「震災後」に考える〉』を刊行

「東日本大震災復興支援室」では、『早稲田大学ブックレット〈「震災後」に考える〉』の既刊33冊を、被災5県（青森・岩手・宮城・福島・茨城）の全高等学校約580校（高等専門学校・特別支援学校含む）に寄贈。同シリーズは、東日本大震災の被災地域復興支援のために、主として本学学生・教職員によって行われてきたさまざまな研究・支援プロジェクトを通じて得た知見・思索・活動を広く社会に提供し、その一助に資するために刊行されています。

問い合わせ先：早稲田大学出版部
TEL：03-3203-1551　http://www.waseda-up.co.jp/

副総長・常任理事
清水 敏社会科学総合学術院教授

しみず・さとし
1980年早稲大学大学院法学研究科博士後期課程中退、徳島大学教育学部専任講師、信州大学教育学部助教授を経て1993年早稲田大学社会科学総合学術院教授。2006年より副総長・常任理事。2010年より早稲田佐賀学園理事・評議員。他に文部科学省大学設置・学校法人審議会委員など。主な著書（共著）に「入門労働法」「自治体における臨職・委託労働者の法的地位」。

Interview

早稲田の復興支援の知見を世界へ

復興支援に関する早稲田大学の姿勢について、清水敏 副総長に話を伺いました。

教育機関としてふさわしい復興支援とは

早稲田大学では、東日本大震災に間を置かず設置した鎌田総長を室長とする「東日本大震災復興支援室」を中心に継続的な復興支援を行っています。教育機関である大学としてふさわしい復興支援とは何かを検討し、「(1) 被災学生の就学支援、(2) 被災地域への支援、(3) 研究を通じた復興支援」の3つの支援方針を打ち立て、全学的な取り組みを進めてきました。被災した学生への就学支援として「学費の減免」「特別奨学金」措置を設け、いかなる状況になっても在校生の就学を継続できるような環境を整えています。被災した地域での支援活動は、平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）が中心となり、現地の受け入れ環境の整備、学生の安全の確保、事前教育の徹底など、これまでのボランティア活動で得たノウハウを生かして大規模に展開し継続してきました。また、大規模な複合災害からの復興には、さまざまな学問分野の連携が不可欠です。総合大学である本学では各専門分野のさまざまな知見を結集する「東日本大震災復興研究拠点」を設け、復興に関する全学横断的な連携プロジェクトを進めてきました。

東日本大震災から3年が経とうとしている現在、復興が進む中で支援の形は多様化しています。その変化の過程において、継続的に復興に取り組むためにはパワーが必要です。早稲田大学が復興支援を継続できる背景には、世のため人のために行動する利他の精神に満ちあふれた人材が多く集まっていること、そして自身が被災しながらもボランティア学生の受け入れに尽力してくださった現地の校友、全国の校友からのWASEDAサポーターズ倶楽部を通した支援があります。また、職員によるサポートがさまざまな復興支援活動の土台となっており、さらに職員の理解を深めるために2012年度以降の新入職員研修では、気仙沼および陸前高田でのボランティアも実施しています。

東日本大震災の復興支援がグローバル課題の解決に寄与

一方で被災した地域・人々とともに行う復興支援は、大学の英知と人間力を社会に還元するという面だけでなく、参加した学生・教職員にとって多くの経験と気づきを与えてくれる場ともなりました。現地で活動した学生や教職員は「目の前の課題を解決するためにこれまで学んだことをどう生かせばいいか」「これまでの科学技術の在り方や学問・研究に対して、研究者としての社会的責任とは何か」を深く考え、模索しています。

東日本大震災の復興に関わる支援活動および研究は、資源、貧困、エネルギー、紛争、高齢化社会などグローバル規模で解決しなければならないさまざまな問題に応用することができます。復興支援で経験や知識を得た学生たちが学び、社会で研鑽を積み、国内外のさまざまな課題に対してリーダーシップを発揮して活躍することが、人類社会への貢献につながっていくことになるでしょう。まずは、東日本大震災の復興支援に関わった学生のその後の学習状況や進路選択、キャリア形成への影響などを継続的にフォロー、分析し、今後のさまざまな教育・ボランティア活動に生かしていきたいと思います。それが大学として東日本大震災の復興に携わる意義であり、関わった方々への感謝を示すことになると考えています。これからも本学はオールワセダで復興とそれに連なる研究・教育に取り組んで参ります。

第二世紀へのメッセージ

早稲田大学に関係のある方にお話を伺い、
客観的な視点により、
早稲田大学の魅力や課題を浮き彫りにします。

株式会社東京証券取引所 常務取締役

静 正樹 さん

[プロフィール]
しずか・まさき
1959年生まれ。早稲田中学・高等学校出身、1982年早稲田大学法学部卒業、東京証券取引所入所。1996年から2004年まで上場部の管理職として、外国会社向けマザーズの開設、社外取締役導入をはじめとする上場制度やディスクロージャー制度の改革に従事。その後、財務部長、経営企画部長を歴任。2007年執行役員、2011年常務執行役員。2013年6月より現職。法務省法制審議会会社法制部会委員、日本証券アナリスト協会理事なども務める。

Message to the next generation

こだわりを持って努力し続ける人。それがグローバルで活躍できる人材

東京証券取引所で経済情報の最前線に立ち、日本経済の変動を目の当たりにしてきた静さん。上場制度やディスクロージャー制度の改革、あるいは新興市場の立ち上げなどに従事されてきました。歴史の動く姿を現場で見たいとの思いを強くしたきっかけや、大学での思い出、これからの早稲田大学に対する期待を伺いました。

「歴史に参加する」ための勉強に勤しんだ学生時代

――どのような学生時代を過ごされましたか。

私は中学から大学までの10年間、早稲田に通っていました。いまでも覚えているのは高校2年時の世界史の先生が話してくださった「歴史を学ぶのは、覚えたり真似するためではなく、いずれ君たちが歴史に参加するためだ」という言葉です。その後の学生生活や授業の聞き方、社会人としての生き方などに大きく影響しています。歴史の動く姿を現場で見たいとの思いから、当時はジャーナリストを志していました。

しかし大学は法学部に進学。多くの同級生が法曹を目指して司法試験の勉強をしている中で、志望が異なる私は寂しさを覚えることも多く、仲間集めに精を出していました。試験前の勉強会や、当時あった法学部祭での模擬裁判など、自らさまざまな機会を設けては仲間を集めました。また、いろいろな人の意見を聞くことは社会勉強になると考えていたので、学者の思考を知ろうとさまざまな授業に出席しました。いま思えば「歴史に参加する」ための勉強という意識が高かったのかもしれません。ありがちな学生生活かもしれませんが、私にとって早稲田での10年間はとても有意義な日々でした。

情報の最前線で日本経済の変動に接する日々

――これまでの経験で、歴史の変化に触れることができたと感じた出来事はありますか。

東京証券取引所（以下、東証）に入所したのは、とても真面目な人事担当者に出会い、この会社なら真剣に議論できると感じたからです。やはり仕事に興味を

もって一生やり続けるためには、真面目に取り組むことができる、あるいは誰かのために働くといった明確な理念を持っていることが重要だと思います。入所後は1996年から約20年にわたり上場関係の仕事に携わり、さまざまな歴史の動きを最前線で見ることができました。ちょうど不良債権問題が山場を迎え、国の経済も疲弊していた時期です。北海道拓殖銀行、日本長期信用銀行、山一証券など、それまで一流とされていた企業が次々と倒れていく姿を目の当たりにし、さまざまな感情を抱きました。とりわけ上場企業と投資家の情報ギャップに対しては苦心しました。

当時は投資家や一般に向けた会社情報の適時開示は企業判断に委ねられていた時代です。一方で上場企業から取引所への情報の伝達はルール化されており、私の元には企業からさまざまな情報が入って来るのに、社会には公表されていない。そうした情報ギャップの矛盾が繰り返される状況に危機感を覚えていました。改革の意志を決定づけたのは1998年の長銀破綻時です。国会で金融再生法が審議され、長銀が適用第1号となってその株券がただの紙切れになるのも時間の問題という段階に来ているにも関わらず、市場ではそれが高値で取引されているという事態が生じました。毎日、長銀の担当者に会って情報開示すべきだと説得するのですがなかなか難しい。そこで「このままではダメだ。上場制度を改正し、ディスクロージャー制度を確立させなければ」と、改革に踏み出しました。適時開示の義務化が決定したのは翌1999年。1949年の設立から半世紀続いた東証の歴史の、ひとつの転換点に参加することができたとうれしく思っています。「これぞ俺のやりたかった仕事だ」とひしひしと感じることができました。今はこれに変わって社外取締役の普及がライフワークのようになっています。

――半世紀にわたる歴史を変える改革を行うには強い意志が必要だと思いますが、どういった思いで挑戦されたのでしょうか。

企業側にしてみれば、情報公開は内容や時期など難しい面もあるかもしれません。しかし最前線でさまざまな情報ギャップを目にし、制度がないから情報開示を進めることができないという矛盾を感じていましたので、必要な情報を投資家に提供することは上場企業の義務として制度化しなければならないとの信念がありました。東証は、東証上場会社からの公式発表が最も正しい情報だという投資家の皆様の信用に支えられています。その投資家に満足していただくためには何が何でもディスクロージャー制度を整えて市場を適切に運営する、あるいは投資家が満足する市場を実現しなければならないとの使命感があったのかもしれません。経済団体にそのことを繰り返し訴えました。

2000年の新興市場・東証マザーズの上場制度の設立などに現場の立場から携わり、内容の公正性を図るために、第三者による四半期の簡易監査基準の仕組みをつくったときも、正しい情報を伝えなければ新しい市場は育たないという思いがありました。会社に新しい人が入らなければ組織が活性化しないのと同様、株式市場も新興企業が参入しなければ活性化しません。日本経済を盛り上げるためにも、また新規産業を育成するという意味でもとても重要な意味を持っていたと思います。史上最年少の25歳で上場を果たした株式会社リブセンスの村上太一さん（2009年政経卒）のように、身近に感じる矛盾を解消するために会社を立ち上げた若手経営者など、もっと夢のある企業がどんどん活躍できるような制度が必要だと考えています。

当事者意識を持ち情熱的に挑戦し続ける人材の育成を！

――日本の歴史の変化を意識してきた立場から、人々の先頭に立ち、これからの歴史をつくるグローバル人材の育成に努めている早稲田大学、そして学生にメッセージをお願いします。

株式市場は6割を海外投資家が占めるほどグローバル化が進んでおり、海外企業のトップと議論することもあります。そこで感じるのは、世界のことを知っている、あるいは海外で働いている人＝グローバル人材ではないということです。世界の人と渡り合うためには、情熱を持ってひとつの専門分野をとことん追究し続ける意志が一番大切です。どうしても捨て置けないと思うことを発見して、こだわり続けてください。どんな分野であれ、ひとつのことをとことん追究したことのある人は、言葉や知識・分野の枠を超えて世界中の多様な人々と渡り合えます。早稲田大学には、ぜひ学生が情熱を持ち続けられるものを見つけられるよう、現実の問題発見・解決に取り組む教育に力を入れてほしいと思います。

また、いまの学生さんはスマートになりすぎて、目の前を通り過ぎるさまざまなことを見落としている印象を受けます。海外の人と比べても自国の歴史や文化へのこだわりも薄いですよね。しかし足元のことを学ぶことはとても大切です。その上で海外の文化や歴史、言語を理解し、うまくコミュニケーションすることができれば、素晴らしいグローバル人材と言えるのではないでしょうか。私も学生時代からこれまでの人生の中で「これだ」と思ったことを諦めずにやり続けてきました。学生時代は最も自由に情熱を傾けられる時間があります。自ら道を見つけて突き進む早稲田の学生らしく、ぜひ挑戦してほしいと思います。

教員と学生が互いに尊敬し合える学びの場を目指して

東 玲奈 国際学術院専任講師

2032年の創立150周年に向けて本学のあるべき姿を考える「Waseda Vision 150」。そのVisionのひとつ「世界の平和と人類の幸福の実現に貢献する早稲田の研究」を推進するため、女性研究者の活躍を通じた新たな視点と思考の導入も期待されています。今回は、東玲奈先生にお話を伺いました。

人は周りの環境からヒントを得て行動している

社会科の恩師を通して心理学という学問を知り興味を持ったのは高校生のときです。そのときは臨床心理学を学習しようと心理学科に進学しましたが、理系研究者の父の影響で認知心理学の分野に惹かれていきました。大学か企業で研究を続けたいと思い始めたきっかけは認知心理学の教授が夏休みの図書として薦めてくださった『誰のためのデザイン?』という人間工学の本です。人間はボタンを見れば押し、レバーがあれば引き、右向き矢印を見れば右を向く、というように、環境からごく自然にヒントを得て行動しており、器具などのデザインが意図する人の行動がその自然な行動に反するものであるとき、人の行動はより遅く不正確なものになるということを初めて知りました。どのような環境なら人は正しい行動をとることができ、どのような環境下では行動を誤るのか。そしてそのような行動の早さや正確さにおける違いはどのような認知過程で起きているのか。学生時代はそのテーマに夢中になり実験を繰り返しました。

海外の教育・研究機関での学び

しかし当時の日本の心理学研究は非常に体系的、かつ海外から一歩も二歩も遅れた古い情報しかない状況で、海外の進んだ研究に触れたいと一年間の留学を決意。周りが就職活動に動き出すころには手続きを終え、早々とイギリスの大学院へ留学。気づけばポスドクまで含めて10年間、海外で研究を続けていました。

海外ではさまざまな分野と連携した研究が進められています。発達障害児の見え方や脳内イメージという比較的医療に近いテーマを研究していた私は、海外滞在中に精神科医を中心とした分野連携プロジェクトのメンバーとして22番染色体異常による発達障害児に関する研究に携わりました。医学の知識がない私に対しても、実験の組み方や進め方など得意分野に関する意見を求め、ひとつのテーマを解明しようとする研究者たちの姿勢は印象に残っています。多国籍の職場でかつ男女ともにさまざまな分野の研究者の集まりであり、性別・国籍・専門分野などでマイノリティだと感じたことは一度もありません。

▲博士課程を過ごしたケンブリッジ大学のペンブルック・カレッジの図書館

▶ロンドンオリンピックのときテムズ河岸にて息子と

学術的ツッコミでクリティカル・シンキングを涵養

ゼミではクリティカル・シンキング（批判的思考）の涵養を意識した発表型の授業をしています。興味のある分野について調べたことを英語で発表する学生に対して、「別の解釈もできるよね」「著者の意見は本当に正しいのかな?」といった学術的なツッコミを入れるのです。学生にはひとつの意見だけが正しいのではなく、さまざまな解釈について考えることで学術的な視点を身につけてほしいと考えています。一方で、学生は興味の対象が一人ひとり異なり、記憶や学習などの基礎研究から消費者心理や交渉術、対人魅力研究まで、発表テーマはさまざまです。新たな視点に気づかされることも多く、学生との授業は非常に楽しいです。

すべての人に“敬意”を持って接する

私が大切にしていることは、高校の恩師から学んだ“敬意”を持って人と接することです。生意気盛りの高校生に向かって「私はあなたたち一人ひとりを人として尊敬しています」と真剣に語りかける恩師の姿に、この先生のような人になりたいと思いました。講師として早稲田の学生たちと接している今も同じです。学生は目の前を通過していく存在ではありません。やんちゃな学生や大人しい学生などすべてが愛おしい存在です。中には問題を抱えて内にこもってしまう学生もいますが、学生たちには困ったり悩んだりしたときこそ顔を見せに研究室に来てほしいと伝えています。微々たる力ですが、新しい視点のひとつを提供できるかもしれませんから。これからも出会うすべての人と真剣に向き合うことで、教員と学生がお互いに敬意を持って接することのできる環境を築いていきたいと考えています。

プロフィール
あづま・れいな
上智大学文学部心理学科卒業。ロンドン大学University College LondonでMaster of Scienceを取得。ケンブリッジ大学で心理学のPhDを取得。ミュンヘンのマックス・プランク研究所、ロンドン大学キングスカレッジ付属精神医学研究所などでのポスドクを経て現職。

A WASEDA Miscellany

International Education in Mathematics

本学外国人教員が、自らの研究のこと、趣味や興味あることなど日々の雑感を語ります。

GUEST Martin
Professor,
Department of Mathematics,
Faculty of Science and Engineering

ゲスト マーティン
理工学術院教授

Waseda University is justifiably famous for educating many foreign students, so I would like to offer some personal views on the future of international education in my own subject, mathematics. I came to Waseda quite recently, after working at Tokyo Metropolitan University for 15 years. Before that I worked in the USA, and before that I studied in England. Thus, my views are influenced mainly by universities in the UK, USA, and Japan. But I have also experienced study and research in Germany, as I shall explain later.

There is a worldwide trend to conducting university education in English, but I do not entirely agree with this. For basic mathematics and science (which is already difficult enough!) I believe that students must study in their native language, until they have reached a certain level of proficiency. On the other hand, for more advanced mathematics courses, it is feasible to have some courses in English. Mathematics is very suitable for this, because statements like $2(a+b) = 2a+2b$ or $(d/dx) \sin x = \cos x$ are the same in every country of the world. If Japanese students know the basic concepts (from calculus and linear algebra), and if they know some common vocabulary (such as "it follows that" and "without loss of generality"), then they can understand lectures in English.

I would like to relate a personal experience of this kind. When I was a graduate student at Oxford University, I spent a year as a foreign student at the University of Bonn, in Germany. I attended a course given by Professor Friedrich Hirzebruch, one of the foremost mathematicians of the last century. He spoke in English, as there were some foreign students (like me) in the audience. But sometimes a German student would ask a question, and Professor Hirzebruch would reply in German. Then he would continue to give the lecture in German (until he remembered to switch back to English). To my great surprise, I could still understand him, even though my knowledge of German was poor. This greatly increased my self-confidence! Afterwards, I was not afraid to attend a lecture on mathematics in German, and I felt more at ease talking to German students and lecturers.

In the same vein, I believe that foreign students at Waseda must be encouraged to attend lectures in Japanese. I am sure that many of them will enjoy the experience and gain confidence, just as I did in Germany. There are other important reasons for doing this. One is that Waseda has many excellent Japanese students, and foreign students will benefit from interacting with them. Another is that Waseda has many excellent Japanese teachers and researchers, and foreign students should not be isolated from them either. Indeed, it is common sense that foreign students should not be segregated; otherwise, what is the point of them coming to Japan at all?

In order to understand a mathematics lecture in Japanese, a foreign student must have a good command of the basics (calculus and linear algebra). It is necessary to know some basic Japanese mathematical vocabulary (expressions like "kono toki", "gyaku ni" and "hitsuyo jubun joken"). My lectures might be a good starting point for Waseda students, as my Japanese sentences are always very simple!

For graduate courses, it is probably desirable to have several mathematics courses in English. The reason for this is that all current mathematics research literature is in English. From a cultural point of view, this may be unfortunate, but it is a fact. On the other hand it means that Japanese universities with mathematics graduate courses in English would have a good chance to attract excellent students from abroad. In other subjects, the question of internationalization is quite delicate. However, because of its universal logic and symbolism, mathematics can be at the forefront of university internationalization in Japan.

抄訳：数学における国際教育とは

今や英語での大学教育は世界中の流行とも言えますが、私の専門―数学においての今後の国際教育については、個人的に考えがあります。私は早稲田に来る前の15年間、首都大学東京で教え、その前はアメリカやイギリスで仕事・研究をしていたので、その国々の影響を受けました。私は、数学や理科の基礎は母国語で得るべきで、上達したところで英語に切り替えるのがいいと考えます。特に数学の方程式は世界共通ですし、基礎と常識的な単語を知っていれば英語での授業も理解できます。オックスフォード大学の大学院生だった頃のドイツ留学先で、英語での授業中、時に先生が話してしまったドイツ語を理解できるととても自信になりました。日本にいる外国人留学生にも、ぜひ日本語での授業を受けることをお勧めします。早稲田の素晴らしい日本人学生、先生方や研究者と触れ合わない手はありません。一方、近年は数学の研究論文は英語で書かれるため、大学院には英語での授業があるのが望ましく、それは海外からの優秀な留学生を惹きつけることにもなります。普遍的な論理と記号体系を持つ数学は、日本の大学の国際化の最前線に立つことができるのです。

最近の共同研究者の一人、国立大学台湾の Lin Chang-Shou 教授と。
西早稲田キャンパスで行われたディスカッションでの１枚

後日 WASEDA ONLINE で和訳がご覧になれます。

■ 日本語版 URL
http://www.yomiuri.co.jp/adv/wol/

■ 英語版 URL
http://www.yomiuri.co.jp/adv/wol/dy/

キャリアの
羅針盤
学生と進路選択

企業の採用担当者やキャリアの専門家などに、最近の採用事情や学生が進路を選択するために必要なことをお聞きする「キャリアの羅針盤」。今回は、本学キャリアセンターの白井由美課長に、早稲田大学のキャリアセンターの役割や考え方、学生の就職事情、ご両親へのアドバイスなどをお聞きしました。

早稲田大学
キャリアセンター
課長
白井由美

**3月以降の主な
就職支援イベントなど**

- **公務員志望者のための面接対策講座：3月4日(火)**
- **学生キャリアアドバイザーOB・OG相談会：3月15日(土)**
  大学4年次に就活生の相談を受けていた学生キャリアアドバイザーのOB・OGが母校に集まり、後輩の相談にのります。
- **第3回学内合同企業説明会：4月14日(月)～18日(金)**
  70を超える企業・団体が早大生のために来校します。5月以降も実施予定です。
- **就活ミニセミナー：日曜・祝日・大学の休業日を除きほぼ毎日**
  時期に合ったテーマを複数立てて実施しています。
- **個別相談：日曜・祝日・大学の休業日を除き毎日**
  キャリアセンタースタッフ、専門アドバイザーが個別に相談を受けます。

※4月以降は低学年向けのキャリア支援イベントも開催。

日時・会場などの詳細および他のイベント情報については、キャリアセンター Webサイトへ
http://www.waseda.jp/career/

自立した学生を育てるための支援を縦横無尽に展開

キャリアセンターの二つの役割

キャリアセンターは、入学後の最初の3年間を、自分の生き方や進路の方向性を見極める期間と位置づけています。早期に就職活動対策を始めるよりも、この間、正課と課外の活動に打ち込むことが、自己実現への道の通過点である就職活動を軽々と乗り越える力を鍛えるからです。このため、キャリアセンターは、入学時に「みらい設計ガイドブック」を配布し、学内のあらゆる成長の場所を学生に紹介するガイド役を担っています。その後は「夢中になれることが見つかるセミナー」「進路・仕事を考えるセミナー」などを実施し、学生が自立した大人に成長して社会に出て行くことを側面から支援しています。

もう一つのキャリアセンターの役割は、就職活動を行う学生に有用な情報を提供することです。ただし個別の学生に個別の企業を斡旋することはしていません。学生には学生生活で培った力を十分に活用し、自立した独自の活動として企業選択をさせています。そのための支援として、就職ガイダンスを皮切りに、労働法や企業研究の方法についての講座、業界・企業の現状と展望に関する業界別講座、自己分析や面接などの実践的な対策講座、公務員、教員、その他資格試験に臨む学生向けの講座などを実施しています。また、授業と重なって出席できないことを考慮し、講義形式のものをオンデマンド配信しています。そして企業の採用広報解禁後は、早大生の人気企業約500社を学内企業説明会に招聘(しょうへい)します。そこには企業の人事担当者だけでなく、OB・OGの社員も入り、各企業から早大生へ熱いメッセージが伝えられます。

キャリアセンターでは、これら二つの役割を全ての学生に対して果たすことができるよう、個別相談を充実させ、予約なしで受けられる体制を敷いており、年間延べ8,000名の学生が利用しています。

早大生の進路と現在の就職活動事情

早大生の卒業後の進路は、「就職7割・進学2割・その他1割」で、この割合は今も昔も変わりません。「就職7割」の内訳は、就職者の半数が大手300社に集中する一方、全体では約2,900の企業・団体に裾野を広げています。また「その他1割」の内訳は、資格試験や海外の大学院へ進学準備中の学生、帰国する留学生、自分の選んだ道を目指す学生など、卒業とともに就職すること以外の進路を自らの意思で選んだ学生がほとんどです。

親御さんが就職活動をしていた（1980年代）頃との違いは、就職ナビサイトを活用した就職活動が行われていることです。パソコンを使って簡単にエントリーできるため、学生は1社から内定を得るために、数十社もの企業にエントリーシートを提出し、数次にわたる面接試験などを受ける一方、企業は数千人の応募者からわずかな人数を見極めなければならず、双方に多大な労力が課せられているのが現状です。

2016年卒業生からの就職活動について

2016年4月入社の新卒採用から、スケジュールが3～4カ月後ろ倒しになります。学業優先で就職活動支援を行っているキャリアセンターとしては、学生には、これにより生じた時間を学業など自分を成長させるための活動に使ってほしいと考えています。また、企業の方には、本大学の成績は信頼のおけるものですので、採用面接の際の材料としてエントリーシートだけでなく成績表も活用いただき、学生時代の過ごし方や学生の考え方・行動特性を知る手掛かりにしていただければと思います。企業が成績を重視し、学生は学業に努めるという好循環が生まれることを期待しています。

就職活動は、自立した大人として、自分の意思で自分の進路を選び取る活動です。周囲の方にお願いしたいことは、本人の考えを尊重してほしいということです。どうぞお子さんを温かく見守ってあげてください。

早稲田大学キャリアセンターから発行されている各種ガイド

Books

本学で活躍される先生方の著書をご紹介します。
※（　）内は著者・編者・監修者の所属（刊行時）です

今号のオススメ

『盛り場はヤミ市から生まれた』

橋本健二（人間科学学術院）他編著　青弓社
2013年12月

大きな街の駅の近くに、小さな居酒屋や食堂が密集する、古い路地を見かけたことはありませんか。そんな路地は多くの場合、戦後のヤミ市から始まっています。ヤミ市は敗戦直後の物資・食糧不足の時代に人々の生活を支え、その後の都市のありかたに大きな影響を与えました。これはヤミ市の成り立ちとその後についてまとめた本。執筆者の多くはまだ20代の若手です。

『生きているとはどういうことか』

池田清彦（国際学術院）著　筑摩書房　2013年12月

「時間とは何かと問われなければ、私はそれを知っているが、時間とは何かと問われると、私はそれを知らない」とはアウグスティヌスの言葉だが、生命もよく似ている。私たちは皆、生命とは何かをなんとなく知っているが、いざ説明しようとすると途端に困惑してしまう。生命を説明するのがなぜそんなに難しいのか。本書は私なりの解答である。

■『転換期中国の政治と社会集団（早稲田現代中国研究叢書）』
田中周（アジア研究機構）他編著　国際書院　2013年10月

■『中国のアジア外交』
青山瑠妙（教育・総合科学学術院）著　東京大学出版会　2013年11月

■『はじめての考古学』
菊池徹夫（名誉教授）著　朝日学生新聞社　2013年11月

■『ミューリエル・スパークを読む』
大社淑子（名誉教授）著　水声社　2013年11月

■『消費者契約と民法改正（消費者契約の法理論 第2巻）』
後藤巻則（法学学術院）著　弘文堂　2013年12月

■『刑事訴訟法の争点（新・法律学の争点シリーズ 6）』
井上正仁（法学学術院）他著　有斐閣　2013年12月

■『標準 著作権法 第2版』
高林龍（法学学術院）著　有斐閣　2013年12月

■『ピグマリオン（光文社古典新訳文庫）』
小田島恒志（文学学術院）訳　光文社　2013年12月

■『プラットフォームビジネス最前線』
根来龍之（商学学術院）監修、早稲田大学ビジネススクール根来研究室他著
翔泳社　2013年12月

■『中国ビジネスを理解する：大局をつかむ11の論点』
早稲田大学ファイナンス研究センター編、川本裕子（商学学術院）編著
中央経済社　2013年12月

■『感性マーケティングの実践：早稲田大学ビジネススクール講義録
アルビオン、一澤信三郎帆布、末富、虎屋各社長が語る』
長沢伸也（商学学術院）編　同友館　2013年12月

■『こうしてテレビは始まった：占領・冷戦・再軍備のはざまで』
有馬哲夫（社会科学総合学術院）著　ミネルヴァ書房　2013年12月

■『鑑の近代：「法の支配」をめぐる日本と中国』
古賀勝次郎（社会科学総合学術院）著　春秋社　2014年1月

■『フクシマから日本の未来を創る：復興のための新しい発想
（早稲田大学ブックレット）』
松岡俊二（国際学術院）他編　早稲田大学出版部　2014年1月

■『ホーム』
大社淑子（名誉教授）訳　早川書房　2014年1月

■『仁政イデオロギーとアイヌ統治』
檜皮瑞樹（大学史資料センター）著　有志舎　2014年1月

■『検証 防空法：空襲下で禁じられた避難』
水島朝穂（法学学術院）他著　法律文化社　2014年2月

Events

本学で5月までに開催されるイベントを一部ご紹介します。
詳細は、直接【問い合せ先】にご確認ください。その他のイベントにつきましては、本学Webサイト（http://www.waseda.jp/）学術講演会・公開行事をご覧ください。

演劇博物館
①『今日もコロッケ、明日もコロッケ―益田太郎冠者喜劇の大正』展
②『六世中村歌右衛門』展
③『サミュエル・ベケット―ドアはわからないくらいに開いている』展

会場 演劇博物館
日程 ①3月1日㈯～8月3日㈰（予定）
大正時代に活躍した喜劇作家益田太郎冠者の作品世界を紹介。劇中歌「コロッケの唄」を再現するほか、帝劇女優森律子の生人形を展示。
②3月25日㈫～4月25日㈮
今回で十年目を迎える本展示。毎年の恒例としては、今回でひとまず千秋楽といたします。総決算として、名品ぞろいの展観とする予定です。
③4月26日㈯～8月3日㈰（予定）
世界の被災地や危機的状況下で上演されている『ゴドーを待ちながら』など、ベケットの演劇を「共生」という視点から捉え直します。
問 演劇博物館　TEL：03-5286-1829　http://www.waseda.jp/enpaku/

會津八一記念博物館「もてなしの器」

会場 會津八一記念博物館「富岡重憲コレクション展示室」
日程 3月1日㈯～4月19日㈯
魯山人の器、明治の朱漆膳一式、茶箱、さまざな徳利などを展示します。
問 會津八一記念博物館　TEL：03-5286-3835　Email：aizu@llist.waseda.jp

Waseda Vision 150 Student Competition 2013 決勝大会

会場 小野記念講堂　日程 3月17日㈪　13：30～17：00
学生が「Waseda Vision 150」の実現に向けた具体的な施策を大学に提案し、その内容とプレゼンスキルを競います。37チームによる予選を突破した8チームが総長や大学理事に企画をプレゼンし、優勝チームを決定します。
問 Waseda Vision 150 Student Competition事務局
E-mail：wv150sc@list.waseda.jp
http://www.waseda.jp/keiei/V150SC/index.html

早稲田スポーツ展～仰ぐは同じき理想の光

会場 ワセダギャラリー　日程 3月25日㈫～4月3日㈭
早稲田スポーツ新聞会が早大生アスリートの活躍を追って全国各地で取材・撮影した写真、競技スポーツセンター所蔵の早稲田スポーツ映像、世界で活躍するトップアスリートのユニフォームやグッズを公開。卒業生、新入生、ご家族の皆様もぜひご覧ください。
問 競技スポーツセンター　TEL：03-5286-3757　http://waseda-sports.jp/

春のボランティアフェア2014

会場 国際会議場 井深大記念ホール　日程 4月25日㈮　12：00～18：00
ボランティア活動に励む学生によるプレゼンテーション大会、メンバー募集ブース、ラウンジ、写真展など、たくさんの催しを予定しています。
問 平山郁夫記念ボランティアセンター　TEL：03-3203-4192
http://www.waseda.jp/wavoc/

春の留学フェア

会場 総合学術情報センター 国際会議場
日程 5月9日㈮午後のみ　10日㈯午前・午後
留学に興味のある方は、留学への第一歩として留学フェアに参加し、多彩な早大留学プログラムの魅力と概要についての話を聞いてみませんか。
※留学フェア詳細スケジュールについては、留学センター Webサイトをご参照ください。
問 留学センター　TEL：03-3208-9602　http://www.cie-waseda.jp/jp/

前号（新年号）の掲載情報に誤りがありましたので、お詫びして訂正します。

『原子力規制委員会の社会的評価：3つの基準と3つの要件
（早稲田大学ブックレット）』

誤 松岡俊二／師岡慎一（以上、理工学術院）、
黒川哲志（社会科学総合学術院）

正 松岡俊二（国際学術院）、師岡慎一（理工学術院）、
黒川哲志（社会科学総合学術院）

写真：佐藤洋一（社会科学総合学術院 教授）

早稲田

Rediscovery of WASEDA

再発見

cover story
表紙のお話

法曹養成の系譜を担う法廷教室

本学法学部の歩みは、1882年東京専門学校開校時の法律学科に始まります。
当時の藩閥政府は、「明治十四年の政変」で下野した大隈重信が創設した学苑を
反政府的な自由民権論者を養成する学校と見なし、さまざまな干渉を加えました。
1883年には、判事・検事や帝国大学教授の私立学校への出講を禁止。
特に大きな打撃を受けた法律学科は、講師不足による学生数の減少や、
学内に起こった学科廃止論などで、一時は存続の危機に陥ります。
そうした難局を大隈や関係者の熱意と努力で乗り越え、以来130余年にわたり
法律家をはじめ多くの有為な人材を世に送り出してきました。
草創期の科目の中には「擬律擬判」との名も見え、
早くから実践的な法律討論や模擬裁判が行われていた記録も残ります。
いま早稲田キャンパス8号館の一角に設けられた法廷教室では、
大学院法務研究科（法科大学院）による模擬裁判の授業などが行われ、
早稲田大学における連綿たる法曹養成の系譜を受け継いでいます。

CAMPUS NOW
【キャンパス ナウ】2014年3月1日発行 通号210号
※本誌記事を無断で転載等する事を禁じます。

■発行　早稲田大学　広報室広報課©
〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104
Tel：03-3202-5454　e-mail：koho@list.waseda.jp
■制作協力　産業編集センター
※CAMPUS NOWは年4回発行の予定です。次号は、5月1日発行を予定しています。

『CAMPUS NOW』は WASEDA ON LINE でもご覧になれます。
■ 日本語版 URL http://www.yomiuri.co.jp/adv/wol/
■ 英語版 URL　http://www.yomiuri.co.jp/adv/wol/dy/
小誌へのご意見、ご感想をお待ちしています。左記発行元まで、お寄せください。